暮らしのなかの

芸と語り②

川田 牧人

ヴァナキュラーな笑いのルーツ(上)

「Y―1」のような市井における笑いの表現活動を的確にとらえるためには、どのような視角が必要だろうか。基本的にはイベントの性格を明らかにし、その源流を歴史的にさかのぼるといったことが考えられる。

近年の趣味文化研究において、「シリアスレジャー」という考え方がある。この考え方はカナダの社会学者ロバート・ステビンスが提唱したもので、アマチュアによる活動で生計を立てるにはいたらないが、相当の時間と労力をかけて専門的な知識やスキルを錬成していくような趣味活動、という意味である(宮入恭平・杉山昂平編『趣味に生きる』の文化論 シリアスレジャーから考える」ナカニシヤ書店、2021)。確かにY―1のような笑いの表現文化は、稽古の成果を披露・発表するという側面があり、その場限りの一発芸よりは練り上げられたものという印象はある。

しかし同時に、真剣な練習を重ねて技術の向上を目指しているという感じはしない。一方でシリアスレジャーの対極とされるのがカジュアルレジャーで、テレビを見たりネット・サーフィンを楽しんだりといったどちらかというと受動的な余暇の過ごし方である。人前に出て自らネタを披露したいという欲求にもとづいた表現行為であるY―1の余興芸が、そちら側に位置しないのは明らかだろう。この連載のタイトルにあるように、まさに「暮らしのなか」での積極的な楽しみ方であるからだ。

もう一点、練習の成果として発表されるに値するとされるものは、ビアノやバレエといった、いわゆる外からもたらされた習い事が中心である。しかし余興芸は外から受容した楽しみ方というよりは、奄美の自文化をカスタマイズしたり現代風にアレンジしたりして表現するという側面を見のがすことはできないだろう。

アマチュアによる自文化の表現行為という点では、鶴見俊輔の限界芸術論も触れないわけにはいかない。鶴見は芸術作品を三種類に分け、専門的な芸術家によって創出され、専門的享受者に受容されるものを「純粋芸術」、専門的芸術家によって創られるが非専門的な大衆に受け入れられるものを「大衆芸術」、そして創作者も享受者も非専門的立場で、芸術と生活の境界に位置するものを「限界芸術」と呼んだ(鶴見俊輔「限界芸術論」筑摩書房、1999)。

その芸術の担い手が自らの文化的ポテンシャルを最大限に活かした表現という意味で、鶴見は「民俗芸術」にも触れている。

現在、民俗学の分野で、この考え方を現代的にバージョンアップさせた「ヴァナキュラー・アート」(日常世界での創作活動)研究が興っている。この研究の先鞭をつけた菅豊は次のように説明する。

「ヴァナキュラー・アートは、平凡な普通の人びと、すなわち『小さきもの』たちが生きるなかで、周りにある『小さきもの』を巧く使いこなし、なんとかやっていくという生活の技芸と知識、創造力、そして情意が埋め込まれた創作物や創作活動である。そしてそれは、自分たちのことを『芸術家』だと認識していない『野の芸術家』たちが、あるときには抑えがたい強い衝動によって作ってしまう、またあるときには気まぐれに心惹かれて、ただなんとなく作ってしまうようなアートである」(菅豊編「ヴァナキュラー・アートの民俗学」東京大学出版会、2024、30~31頁)。

ヴァナキュラー・アートには、非公式性、非専門性、独学性、自発性(自然発生性)、非市場性、物語性といったさまざまな性格がある。素人芸人が

2024年3月に刊行されたヴァナキュラー・アートの研究論集。筆者も「島の地産地〈笑〉論―ヴァナキュラーに笑い合う余興笑芸人たち」を寄せている

独自なやり方でネタ作りをし、木戸銭やギャラを目的とせず、演者自らの文化と歴史に下支えされた技芸で笑いを起こすY―1は、まさにヴァナキュラー・アートの真髄だといえないだろうか。

前置きにやや紙幅を割きすぎた感もあるが、奄美文化の自己表現の源流を時間軸をさかのぼってたどろうとするときに、避けて通れないのは音楽による自己表現であろう。とくに歌詞つきの音楽であれば、その言葉にもメロディにも地域の個性が十分に反映されるというのは、奄美に限った話ではない。もっとも奄美の場合、伝統的民謡としての島唄だけでなく新民謡、奄美歌謡といったジャンルが次々と開拓されたり、音楽そのものと同時に産業としても展開したりする側面がある。

その文化的重厚さを「奄美うた」と総称する加藤晴明は、音楽と余興の関係について、次のように記している。「うたの文化は、奄美の余興文化とも苗床でつながっている。奄美は余興が盛んな島でもあるからだ。そこには、娯楽を自分達でつくり自分達で楽しんでいく文化的な遺伝子のような苗床がある」(加藤晴明・寺岡伸悟「奄美文化の近現代史」南方新社、2017、230頁)。このような類縁関係に自覚的になれば、音楽によって培われた自文化アイデンティティーの表出フォーマットが、やがて余興という演芸活動にも影響していくことが予想される。直接的に因果関係が想定される現象としても、1990年代の島おこしにかかわるさまざまな活動の中で、とくに奄美ポピュラー音楽の活性化と余興イベントは深くつながっている。実際にどのようにつながっているのか、詳細は次回へつづく。

(文中敬称略)

(成城大学文芸学部教授)